

輪島塗

石川県金沢市立高岡中学校

村上 定雄

石川県の在来工業の多くは、もともと自給自足の農山漁村の副業として成立したものが多く。これが産業として発展するのは、加賀百萬石になってからであり、多くは元禄年間（一六八八～一七〇三）からである。そして商品経済が発展してくる化政年間になると生産の伸びが顕著となる。

藩政時代から長い歴史と風土に育てられてきた工芸のひとつが漆器である。輪島・金沢・山中で生産され、それぞれ特色をもっている。山中塗はロクロを応用した実用向き工芸品としてすぐれ、金沢塗は時絵のすぐれた技術で評価され、輪島塗は堅牢優美な工芸品としてよく知られている。特に輪島塗独自の「沈金」技法はすぐれている。輪島塗の歴史が最も古く、今日残されている資料として室町時代と推定される朱塗輪島塗高台付盛器がある。

1. 輪島塗の特長

輪島塗の最大の特長である堅地漆器の工法は、天正十年（一五八二）に加賀藩主前田利家が能登巡行の折、「地の粉」を作っている所に立ち寄っている史実から「地の粉」はそれ以前から輪島塗に使用されていたと認められる。この「地の粉」は輪島市の小峰山から産する珪藻土の一種である。黄色の土で、これを焼成し粉末にして漆に混ぜて木地に二回、三回と塗り重ねる。このように下地を固める技法を開発し堅牢な漆器づくりに成功したのである。以来、漆器製造を業とする者が増加し、元禄時代（一七〇〇年頃）には漆器は他の地方へ移出されるようになった。

2. 輪島塗の立地と製造工程

能登半島の北端に位置する輪島郷は、ケヤキやアテなどの原木に恵まれ、また、漆の産地でもあった。そして藩政時代には、産業奨励のためにこれらの植林や山

地林の保護育成に努力したのである。このように、素材としての用材と漆のあったことが、輪島塗の成立に大きい役割を果たしたといえる。

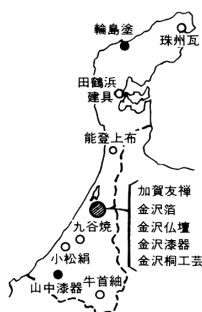
輪島塗の製造工程は、生漆を惜しみなく大量に使うこと、製造に要する手数が多くかかり、殆ど手労働に頼っているところに特色がある。塗りはお椀で二十三工程、膳部類では二十九工程、手数は普通品で七十五回、極上品では百二十四回に及ぶ。その上、作業工程にかかる日数は百四十日を必要としている。漆器生産の基本的な工程は木地づくりと、その木地に漆を塗る工程、最後に模様をつける加飾の三部門に分かれている。そしてその三部門がまたいくつかの職に分かれて全体として九職の分業体となっている。その九職は製造業者の注文と支配によつ

業種別事業所数および従業者数
(昭和53年度)

		企業数	従業者数	従業者の全体に占める割合
漆器製造販売		323	1,628	72%
木地	指物	35	73	3
	曲物	9	16	1
	朴	16	26	1.5
	地	20	36	2
加飾	沈金	90	156	7
	蒔絵	136	235	10
	呂色	34	93	4
合計		663	2,263	100

伝統産業「輪島塗」より

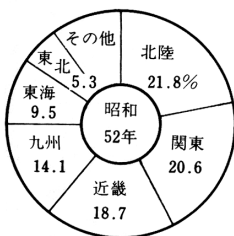
●石川県の在来工業



●参考文献

「石川県の伝統産業」 石川県高等学校
校野外調査研究会
「伝統産業 輪島塗」 石川県輪島市
「輪島漆器」 張間喜一・古今伸一郎
共著（北国出版社）
「石川県史資料」 石川県教育委員会

輪島塗の販売先



用主体からデザイナー等の工夫が要求されるようになった。

て結ばれており、塗りを主体とする製造販売業に従事する者が全体の七二%を占めている。このことから輪島塗にとって塗りが最も中心的な分野であることがうかがえるのである。

3. 輪島塗の販売

輪島塗の販売方法は、古來行商人によって全国に出荷されるという独得の方法がとられてきた。おもに買いあげるのは、各地の富裕層が旅館などであった。販売物はおもに膳や椀類など生活用品が多かったため、使用頻度が高く、堅牢なものが望まれた。また、輪島塗は摩耗によって塗りがはげても、修理すれば新品同様になることもあって、行商人は販売とともに修理の受け付けを行ったことが好評を得、輪島塗の信用を高める結果ともなっていた。このように、輪島塗の販売を支えてきた行商は、今日殆ど絶えてしまい、中央の漆器問屋を通して専門店やパートに陳列して販売されるようになった。買手側の趣向の多様化に伴って、実

4. 後継者の養成

輪島塗はその技術が複雑であり、長期の年季をかけないとなかなか習得できないだけに、昔から従業者になる者は業者の子弟か、農村の二、三男に限られていた。そして、絶えず潜在的な過剰労働力を輪島塗の従業者として供給することができた。けれども、近年は後継者不足に悩んでいる。後継者の不足を解消するため

輪島市における輪島塗の地位

	市全体	輪島塗	ウエート
就業人口	17,965人	2,435人	13.6%
事業所	2,305社	769社	33.4
生産額	19,174百万円	11,260百万円	58.7

に、昭和四十二年、輪島漆芸技術研究所が市で設置され、昭和四十七年に石川県に移管されようやく若手技術者の養成も軌道にのった。そして、輪島実業高校に漆芸科が設置され、その卒業生もようやく伝統ある輪島塗の後継者として大きい力になってきた。

5. 輪島塗にかかわる行事

輪島塗の職人たちは、新年を迎える除夜の鐘が響き渡ると、親方から贈られた袴または紋付で神社や寺院のお参りを済ませる。そのあと、親方の家へ挨拶に行くので、親方の家は終日これらの人達でにぎわう。

また、「だけのぼり」という行事がある

つて、高洲山（通称嶽山：海拔五六七メートル）へ毎年五月八日の山開きの日に登山する。

これは、漆器関係の人達は一日中座ったままの作業であるため、この運動不足の解消と体力増進を目的として、レクリエーションも兼ねた行事である。この日は各職場一斉に仕事を休み、早朝から山に登り、酒宴を開いて一日を自然と親しみ、お互いの親交を深める。

「地の粉まつり」は、毎年六月十九、二十日の二日間、輪島塗の今日の発展に貢献した地の粉の発見や祖先の苦勞を偲び、感謝する祭で、この二日間、輪島市の人々はあげてお祭りでにぎわう。このように、輪島塗が輪島市の発展に大きく関連していることで、輪島塗に伴う行事がこの地域の特徴である。

6. 課題として

原料漆について、今日能登では殆ど生産されないもので、九四%は中国産漆を使っている。そして、その精製漆の価格は、日本産漆の約三分の一の価格であるが、年によって輸入量の変動が激しく、国交の安定化が望まれている。

また、手労働の生産、そして多くの工程に分かれているため製品の価格が年々高くなってきている。

技術の維持と量産への工夫がこれからの課題といえよう。